

映画は未だ声を持たない。もちろんトニー以降、映画には音楽も環境音も俳優たちの声もついた。モノラルからステレオ、5・1チャンネル、7・1チャンネルなど、その後の映画の音の進化は目覚ましい。『メッセージ』『ダンケルク』『ブレッドランナー 2049』などの最新のアメリカ映画を観るとまるで映画自身が自ら発する音の中にいるかのようで、物語を語るためにつけられたそれまでの映画の音とはもはや根本のところでもまったく違ってしまった別次元の音が飛び出してきた。だがそれでも映画は「声」を持たない。映画自身が発する「音」はついに目の前に現れたが、「声」はまだ存在しない。

『滝の白糸』だったかトニー初期の溝口健二作品を観ると、何か過剰すぎる音の響きや音にならない音のざわめきが聞こえてきてドキドキする。そこにある何かの音というよりも、ついに自身が音を持つことになった喜びや驚きに震える映画の「声」を聞いた気がするのはいだけだろうか。もちろんゴダール映画には、あのトニー初期の溝口の音、映画の「声」がこだまする。初期の『気狂いピエロ』の瓶を舐める音、レコードの音、『ウィークエンド』のクラクション。そして近年では『ゴダール・ソシアリズム』のノイズや風がマイクに直接当たるボコボコ音、『さらば、愛の言葉よ』のどこから飛び出してくるかまったくわからない音。近年のアメリカ映画が獲得した新たな音のはるかかなたで、映画が自身が発出するともがいている。映画には声があるはずはどうして誰も気づかないと、どこかで映画が怒っている。3D撮影された『さらば、愛の言葉よ』の狂った空間設計の隙間の向こう側で、映画が声を上げているのだ。

遠藤麻衣子の『KUCHISAN』『TECHNOLOGY』という2本の作品には、溝口やゴダールが敏感に感じていた「映画の声」がそこにあった。いや、それはまさに「映画の声」の物語だった。映画自身が「映画の声」に真正面から向き合っていた。それは遠いこだまではなく、はるかかなたの存在ではなく、映画が月から地上に落ちてきていた。沖繩に住んでいた。アメリカ映画がその技術力によって「映画の音」を発明した今、われわれの耳はかつてなら聞こえることのなかった「映画の声」を聞くことができるはずだ。そんな映画の可能性に遠藤麻衣子は賭けている。いや、賭けというよりもはや「映画の声」はそこにあるのだからカメラを向ければそれは撮影できるのだと、これら2本の映画は語る。そしてそこからは「映画の声」が語る映画の物語が聞こえてくるのである。そこからようやく、新しい映画の物語が始まる。遠藤麻衣子は当たり前のようにそれをやり始めたのだ。ゴダールや溝口の一步先へと言ったら大袈裟だろうか。いや、一步先に広がる映画自身の語る物語を、彼女は写そうとしているのだと思う。そこからはすべての映画の歴史が聞こえてくることになるはずだ。